

国立大学における入試研究の動向

国立大学における入試研究の動向

昭和62年度より大学受験機会の複数化が実施されたのは大きな改革であった。入研協では第8回大会においてこの問題を取りあげ、シンポジウムで討論した。これについてはこの号に特集が組まれているので御覧いただきたい。各大学からの今期の報告は昭和61年度のもので大部分であるので、複数受験に関する研究は少数である。今年度以降の重要研究課題である。

大学入試研究の基本は入試に関する資料を収集、整理し、その規則性を読みとることである。資料は入試以前のものとして高等学校の調査書、連続受験者では昨年度の成績があり、本番の共通第1次学力試験成績、学内第2次試験成績、続いて追跡調査資料として入学後学内での成績である。成績そのものでなく、それを標準化したもの、偏差値としたもの、あるいは席次だけを問題とすることもある。さらに卒業後の能力を評価するものとして各種資格試験（国家医師免許試験等）の可否を利用することも多くなった。これらの数量の平均値、標準偏差、相関係数などを計算し、入学試験の妥当性を調べ、改善案を考えるのが正統的方法である。問題は成績の分布が必ずしも正規分布とならないことで、従って標準偏差、相関係数だけではその性格を表すのに十分ではない。分布を図示して視覚に訴えるのはしばしば有効であり、散布図を中心に分析を試みている大学が多くなってい

る。

これらの作業は継続して行わなければならない。長期間の経過をみることによりその規則性を知ることができる。規制性には、その大学、学部の特長事情によるものもあり、普遍性をもつものもある。普遍的な結論は一般に公表するのが適当と考える。今までの研究から得られている結論として、高校調査書の識別力、精度の高さをあげることができる。調査書成績と入試成績あるいは入学後の学内成績との相関の高いことがほとんどすべての調査校から報告されている。卒業後の資格試験合格率ともかなりの相関関係がある。つぎは高校調査書における高校間格差をいかに扱うか、調査書をいかに利用するかが研究課題であろう。

これに対し入学試験の成績は、学内成績との相関係数がそれほど大きくないことが報告されている。これはいわゆる選抜効果によるもので、入試成績の上位のものだけを拾った合格者だけに対する統計であるので、入試成績と他の量との相関係数は全受験者において計算したものより小さくなってしまふのである。単に相関係数の大小から、入試成績が調査書成績に比べて識別力が劣るとは結論できない。選抜効果を補正した上で比較をする必要があり、補正の方法も種々試みられている。なお調査書成績も入試成績と相関をもつので、間接的ではあるが選抜効

果を受け、その補正が必要である。入試成績と、それから4年経った卒業時あるいは卒業後の成績とでは相関がかなり小さくなり、さらに選抜効果で小さくなることとあわせ、卒業時のデータから入試の妥当性を論じるのはかなり精度が悪い。

伝統的な筆答試験に対して、いくつかの多様な選抜方法が行われており、それについての調査研究も成果が蓄積されつつある。推薦入学、実技・面接・小論文等、帰国子女の入学などである。推薦入学については、それが定員の一部分である限り、結果は良好である。これは前述の高校調査書の高精度によるものであろう。実技・面接・小論文を実施している学部は十数パーセントあり、詳しい追跡調査も行われている。このようなパターン認識を数量化することは、

経験を積んだ筆答試験に対して比較的新しいものであり、その客観性、精度をどの程度のものであるかがまず問題である。またこのパターン採点が、筆答試験で測定される受験生の能力と同じものを評価しているのか、あるいは異なる面をみているのか。これらは面接、採点のやりかたにも関係することであろう。今後の研究対象である。

この他に学生の意識調査、志願者の進路選択行動についての研究があり、これらは受験機会の複数化に伴い重要な資料となるであろう。

以下は今年度の研究内容を項目に分けて、どのようなことが行われているか、どんな結論が得られたかを紹介する。ただし一つの研究がいくつかの項目に関連するので、はっきり分類できず、重複のあることを御承知願いたい。

共通第1次学力試験と第2次試験

例年の例に違わずほとんどの国立大学で共通第1次学力試験及び第2次試験の成績データを利用した分析を行っている。中でも相関分析を行っているところが相変わらず多いが、その解釈には多少問題があるので、その注意点をまず述べておく。さらに、共通第1次学力試験の成績を共通尺度とした分析、第2次試験の配点比率の検討、受験機会複数化に関連した分析、等について以下に説明しておく。

1. 相関分析の問題点

共通第1次学力試験の各教科と合計点及び第2次試験の各数科と合計点並びに総点の相互間の相関係数を求めて、その経年変化あるいは競争単位間の比較等の分析を行っている大学は極めて多い。また、入学試験（1次・2次）と高校調査書あるいは入学後の成績（教養課程・専門課程）、さらに卒業後の国家試験の結果等との相関分析を行っているところも多い。しかし、